

令和 3 年 6 月 14 日現在

機関番号：42698

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2020

課題番号：18H05780・19K20972

研究課題名（和文）生活基盤型保育における協働志向性の育ちに関する質的研究

研究課題名（英文）Qualitative research on the development of collaborative orientation in life-based childcare

研究代表者

菊地 大介（kikuchi, daisuke）

有明教育芸術短期大学・子ども教育学科・准教授（移行）

研究者番号：10824120

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：今回の調査からやらせではない生活の環境が協働志向性を高め、その行為を呼び起こす様子が観察された。そこから導き出される保育の在りかたと専門性は、民主主義的な価値観の定着と、それに基づく保育の展開である。保育者の持つ価値観は日々の保育に反映されるが、それは個人の自由と尊重、誰もが平等であること、弱者や傷つきやすい者との連帯といった姿勢である。このような民主主義的な価値観は、全ての保育所が依拠する保育所保育指針にも反映されている。これからの保育の質の向上の為に保育所保育指針を見直し、その民主主義的な価値観に準拠した生活を基盤とした保育を作っていくことが求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主的な社会を形成するために求められる豊かな人間形成の重要性を、保育における協働志向性の育ちとの繋がりをから考察したことが本研究の特徴である。保育実践の中から明らかになったことは、民主主義的な価値観は保育の質向上に資するものであり、全ての保育所が準拠する保育指針の内容に示しているものである。特殊な保育環境や専門性を要するものではなく、保育指針の示す当たり前の保育を丁寧に実践することで、質的な向上を果たすことが可能である。これからの保育の質的向上を考える時、今一度保育指針を読み解き、改めてその民主主義的な価値観に根差した普遍的な生活を基盤とした保育が求められる。

研究成果の概要（英文）：From this survey, it was observed that the environment of living, which is not a nuisance, increased the tendency toward collaboration and evoked the act. The ideal form and specialty of childcare derived from this is the establishment of democratic values and the development of childcare based on them. The values of childcare workers are reflected in day-to-day childcare, such as individual freedom and respect, equality for all, and solidarity with the vulnerable and vulnerable. These democratic values are also reflected in the daycare guidelines that all daycare centers rely on. In order to improve the quality of childcare that will be required in the future, it is necessary to review the childcare guidelines for daycare centers and create childcare based on life that conforms to the democratic values.

研究分野：保育学

キーワード：協働志向性 生活基盤型保育 民主主義 寄り合い行動 保育所保育指針

1. 研究開始当初の背景

日本のみならず、世界的にもこれからの保育の在りかたが求められているなかで、乳幼児期の育ちの重要性が社会情動的能力の育成という観点から近年注目を集めている。そこには保育の質の保障という観点が含まれているが、その「質」は相対的な概念であり多元的な内容を含んでいる。このような質の改善に関して、マクロな視点から就学準備型と生活基盤型の2タイプの保育のありかたと認知的能力および社会情動的能力の育ちに注目した大規模な調査¹⁾が欧米を中心に行われている。

認知的能力は知識、思考、経験を獲得し活用する能力であり、社会情動的能力は「長期的目標の達成」「他者との協働」「感情を制御する能力」に関する思考、感情、行動のパターンである。このような社会情動的能力は、言語能力のようにあればあるほどよいとされる能力(ability)というよりも、個性のような持って生まれた気質や性格などの心の特性(trait)、さらには有能感を意味するコンピテンス(competence)として捉えることができる²⁾。現在では生涯にわたる幸せを支えるのは、乳幼児期から育まれる一人ひとり異なる社会情動的な特徴や特性であることが強調されるようになってきたのである。

一方で、ミクロな視点から保育の質のある実践の事実に基づいて行おうとする研究も存在するが、それは保育実践や園のプロジェクトを実際に観察し、質的に語るという手法をとる。これは大規模調査では取りこぼされてしまう親や子ども、保育者の多様な声を取り出そうとする試みであるとともに、研究者の役割として、それらの声を明るみに出していくことの重要性を示すものでもある³⁾。

現在、日本では保育の質に焦点を当てる視座が求められているが、健全な発達を踏まえた子どもの最善の利益という視点から「協働志向性」に注目した。協働志向性は生活がなければ成り立たないと同時に、人間形成への全ての育ちを包含している概念である⁴⁾。こうした協働志向性は、特に近年、乳幼児期の育ちで注目されている社会情動的能力との関連のなかで捉えていくことが適当であると考えられる。しかしながら、社会情動的能力も数値化されてきたものではないという文脈で語られてはいるものの、「能力」として扱われてしまうと(量的に)多い・高いほどよいになってしまう。このような課題に対して、これまでの大規模調査から得ることができた量的な知見に加え、子どもの健全な育ちを支援するために求められる保育の質を改善するために、これからはミクロな視点からその内実を明らかにしていくことが必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、これからの保育をいかに創造していくかへの視座を得ることにある。特に、成熟した市民性を育むことへのアプローチとして幼児期における人間形成への可能性に注目し、「生活そのものを教育へ」という視点を重視する生活基盤型の保育のなかで、「協働志向性」の育ちに焦点を当てる。日々の保育における連続的な生活の文脈から「協働志向性の育ち」を捉えることから、そのために求められる保育のありかたと保育者の専門性を探求していく。

近年、社会情動的能力が認知的能力のように計画・制御可能なものとしてみなされることにより、このような能力モデルが子どもの学びを切り取ることを助長し、その学びが矮小化されてしまう可能性が指摘されている⁵⁾。このような課題に対して、研究者は人間形成という観点から個々の子どもの学びと育ちをホリスティックに捉えるために「協働志向性」に注目する。多様な人間形成への歩みを理解するためには、生活という文脈の中から計画不可能で主観的な個々の学びと発達の方法を拾い上げていくことが必要である。そのためには一人ひとり異なる学びの様相やプロセスである「協働志向性の行為」の質を精緻に描き出し解釈することが求められる。

このような人間形成の内実を保育実践のなかからどのように具体化していくことができるのかは保育学における課題であり、大規模調査では拾えない子どもの多様で多義的な固有世界を取り出し、個別の身体性を備えた「協働志向性」とその行為が作り上げていく世界を解釈的アプローチの立場から捉えることで、子どもの育ちを質的に解明し、これからの保育のありかたを明らかにしていく。

3. 研究の方法

(1)研究のフィールド

生活基盤型保育を営む里山保育やまっこかわっこ(以下、やまっこ)の保育に参加し、参与観察を実施した。参与観察では大人(保育者と保護者を合わせた表記)の一人として保育に参加し、多様な大人と子ども達と生活をともにするなかで、動画撮影とフィールド・ノーツ、参加者への聞き取りによるデータの収集を行った。

(2)分析方法

分析方法としては戈木版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下GTA)を参考に用いた。GTAは表面にはあらわれない現象の構造と変化のプロセスを概念のレベルで把握し、実践の場に応用できる理論を構築して表現することをめざす方法であることから⁶⁾、本研究に適していると考えた。

テキストの作成と切片化

分析の手順としては、動画による観察データからテキストを作成した。テキストの読み込みを行った後、文脈に縛られずに分析作業を進めるためにテキストを内容ごとに細かく切片化した。

概念の抽出

切片化したテキストからプロパティとディメンションという、抽象度の低い概念を抽出した。その後、抽出した複数のプロパティとディメンションに基づいて、その切片を表す概念名としてラベル名をつけた。全ての切片にラベル名をつけた後、類似するラベルを集め、より抽象度の高いカテゴリー名をつけ、それを「状況」「行為/相互行為」「帰結」の3つのパラダイムを用いて、6つのカテゴリーに分類した。頻度や度合いといった程度を表すディメンションは、切片化したデータ間の比較から相対的に判断した。

アキシャル・コーディング

抽出したカテゴリー同士の関連を検討し、カテゴリー関連図を作成した。抽象度の点で、基のデータに最も近い概念であるプロパティとディメンションを用いてカテゴリー同士を関連づけることで、データに根差しながら、相互作用による変化のプロセスを明らかにして現象を把握し、現象の中心となるカテゴリーを現象名とした。

ストーリーライン

抽出した概念を用いてカテゴリー関連図を文章化して各データの現象を把握し、考察した。

4. 研究成果

(1) 2018年度の調査から

我が国の保育は民主的な社会を形成するための土台を育むこと、すなわち豊かな人間形成を重要視しているが、生活基盤型の保育は「協働志向性」の育ちを促進する。本研究ではGTAを用いて、日々の保育から一人ひとり異なる学びの様相やプロセスである協働志向の行為を質的に描き出すことを通して、協働志向性の育ちの構造を捉えることを試みた。

今回のデータからは、自己決定的な要素が高い保育環境では「協働的な活動」の他、葛藤が生じていた。一方で、そこには主体的な活動や予測する行為のある活動が生じやすいことが考えられる。また、予測の行為から活動の楽しさが高まる可能性や、互いにやりたいを満たすかわりである「寄り合い行動」が見られた。「寄り合い行動」の背景には、ぶつかり合う双方の思いを表現するコミュニケーションが求められるが、その為には子どもの中に安心感を育てること、すなわちアタッチメントの十分な形成が必要であると考えられる。また、保育者が葛藤を抱えながら子どもと保護者、地域の人々と「寄り合おう」としている姿勢が、このような保育を成立させることを可能にする最大の要因であると考えられる。

協働志向性

協働志向性とは、時間と空間を共有する集団の中で生じる目的の共有と、それに対する予測であり、この予測に対する行為を協働志向性の行為と呼ぶ。保育所のような集団を構成する成員間、すなわち子ども間にはできる、できないといった差異が生じている。特に異年齢保育のような環境では、乳児のような低月齢児と年長児との間で大きな差異が顕著にみられる。着替えや食事、何かを作るような際には「できない」という差異と「おそらくできないだろう」という予測が生まれ、その差異を埋めようと着替えを手伝ったり食事の介助をしたり、やり方を教えたりといった「差異を埋めよう」とする「行為」が生まれる。溝口(2017)は、できないことはしてあげなくなる、すなわち差異があれば埋められるほうが埋めなくなる、平均や平衡を保とうとするのが人間の持つ特性であり、自然の常ではないかということ、そして、それこそが教育の原理であり、養護の原理であると述べている⁷⁾。このような差異の中で生じる「行為する」・「行為される」ことによって自己の存在を認識し、それによって他者の気持ちがわかるようになるといった子どもの育ちがあることが予測される。

やまっこにおける保育

やまっこは東京都檜原村にある定員15名の保育所である。自然豊かな里山集落で保育は営まれるが、自然体験活動が目的ではなく、食う・寝る・遊ぶといった日々の生活と人とのかわりを丁寧に送ることを大切にしている⁸⁾。ここでは大人が作ったプログラムで「〇〇作ろう!」ではなく、例えば生活の中で生じる「食べたいよね」「じゃあ、一緒に作ろう」から活動を始めようとする。やまっこでは怖さや不安を伴う自然の中だからこそ、安心できる人や社会という存在に出会うことから人間っていいものだな、ということへ辿り着くことを目指している。保育者は「分かち合うことのできる人」「人が輪を作る社会を作りたい」という思いを持っている。このような理念を持つ保育のなかで、民主的な社会を形成するために求められる「協働志向性」の育ちに注目し、様々な現場での実践に応用できる理論を浮かび上がらせることを目指した。

(2) 2019~2020年度(延長)の調査から

近年改定が行われ、新たに施行された保育所保育指針に見られる保育の方向性は、民主的な社会を形成するために求められる成熟した市民性への土台を育むこと、すなわち豊かな人間形成の重要性を示すものである。協働志向性とは、子どもが空間と時間を共有することで起こる予測に対しての行為(態度)と、それを生み出す内発的な動機づけ(心情と意欲)の働きを意味する。このような予測は集団の中に生まれる個々の差異を埋め合わせていこうとする行為と、それに伴う自己認識を通して自分にとっての他者を意味づけし、同じように他者の反応から自己を描いていくなかで、「相手の気持ちがわかる」事につながっていく⁹⁾。このような協働志向性は生活の中で成り立つと同時に、人間形成への全ての育ちを包括している概念でもある¹⁰⁾。

2018年度の調査から、生活基盤型保育における自己決定的な要素が高い保育環境では「協働的な活動」と「葛藤」が生じるとともに、主体的な活動を生み出すきっかけとなる「予測する行

為のある活動」が生じやすいことが観察された。特に葛藤を含む活動からは「寄り合い行動」が見られ、その背景にはアタッチメントの形成のほか、保育者が様々な事象に対して寄り合おうとする姿勢を持っていることが示唆された¹¹⁾。そこで本研究では、より生活の要素が高い「食」の場面に注目し、日々の保育の延長として多様な参加者とともに生活を送る「やまっこキャンプ」の一場面から協働志向の行為と、その育ちの構造を捉えることを試みた。そこから、これからの保育に求められる質的な向上に資する保育の在りかたと保育者の専門性を考察した。

(3) 保育所保育指針から

世界は深刻な環境問題や経済格差、戦争等の深刻な問題を抱え、その対策として保育・幼児教育が注目されている。20世紀型の知識集約・知識偏重型の教育から、「解の無い問いに解を見いだせる深く考え行動する力(キーコンピテンシー)」¹²⁾を持った次世代を育てていくという思いを先進国の多くが共有し、OECD(経済協力開発機構)が中心となって教育改革を進めている。

保育指針の示す内容は教育基本法や児童福祉法の権限を受ける規範であり、全ての保育所に効力を持ち、準拠することが求められている。そこでは情緒の安定を図る「養護」と発達を保証する「教育」を一体的に展開し、心情・意欲・態度の視点から子どもを捉えて5つの領域から知識・技能、思考・判断・表現力、学びに向かう人間性等が出現するように援助することを目指す¹³⁾¹⁴⁾。その舞台となる保育所は「子どもの最善の利益」を考慮し、人権を尊重する民主主義的な価値観の基礎を育てる場であることが示され、子どもが主体であることや、自己を発揮できる環境や援助が図られている。2017年の改定では保育の質向上に力点が置かれ、質向上への原則として保育指針を読み解き、実践に活かすことが求められている。

(4) 考察

今回の結果から、協働志向性の育ちに関して目的の共有とそれに対する予測の行為を呼び起こす働きが、必要性を伴う生活という場で生じていることが観察された。我々が生きていく上で自然な「当たり前の生活」という環境が、協働志向の行為を引き出すことが予測された。溝口(2018)は保育指針に準じる保育を考えたとき、「暮らしは暮らしに対して、正統的でなくてはならない。イミテーションではなくて、必要があるからそうしたという、事実でなくてはならない。」と述べている¹⁵⁾。子ども達は生活の実践の中で、自分達にできることを自ら選択し、参加している。そこでは道具の使いかたや手順、仲間との協働の習得が目的ではなく、みんなで作った方が楽しい、自分たちで作ったものはおいしいという生活の正当性に参加している。このような過程の中で、それぞれの役割を自ら見出し、生活を担う成員として必要な他者への貢献を必然的に身につけていく。

正統的周辺参加論¹⁶⁾では学習は社会的実践の一部であるとし、人が実践共同体に参加し、自らのアイデンティティを形成する過程であるとする。やまっこの保育でも、連続する生活を構成する成員として一人ひとりの参加が共同体の中で受容され、必要とされ、自分が自分らしく貢献していることを実感していくことで、アイデンティティが形成されていく¹⁷⁾。

やまっこにおける生活基盤型の保育は特定の教育プログラムとして意図的に構成されたイミテーションの生活ではなく、楽しさの中に空腹や疲れ、眠さ、危険性、何が起こるかかわからないという不可測性を孕む、暮らしの正当性を持つ。そこにあるのは子どもの心情や意欲に目を向けずに大人が設定した課題を出来るようになることを評価する、先生から学ぶという近代の学校教育的手法ではなく、自らの欲求に応じて形成される「やりたいけど、できない」葛藤に向き合う中で道具が使えるようになる、心(内面)を身体で表せるようになるという学習の営みを保証する。みんなが生きていく環境を作り出すことは、一人ひとりが心と身体を使って具現化していくことによって成される¹⁸⁾。

こうした保育のありかたは子どものみならず、大人にも適用される。保育者は日々の保護者との関りの中でも、その人そのままを大切に、本人や個々の家庭のありかたを最大限に尊重し、丁寧に関係性を紡いでいく。このような生活の延長にあるのが今回のキャンプであり、行事やイベントとして重い負担やルールが押し付けられることもない。一人ひとり異なる人間が集まり混沌とする中で、強制や圧力が無い中で秩序を保ち、協働的に活動できる背景には目的の共有が必要であるが、大人も子どもも身体に基づく必要性(お腹が空いたので食事を作る、食べる)が目の前の目的となり、共有する空間と時間は予測の行為を生じさせて協働志向の行為¹⁹⁾と心地よい秩序を形作っていく。さらに他者への興味や関心に基づく協働志向は他者の行為を自ら学んでいく過程でもあり、そこにある必要を満たすための目的は、みんなの中に「ある」ものである。そこには共同体(社会)に通底する慣習があり、その慣習は自らの行為を内発的に導き出すことを決定づけている。その限りにおいては罰を与える規則やルールといった外発的な動機を強化するような制限を与えなくとも、包丁を振り回すような大きな逸脱はあり得ない²⁰⁾。

このような背景から強制力の無い自由な雰囲気の中でも秩序が生成され、大人も子どもも主体的に活動することが可能であり、それぞれが共同体のなかで関係性を作りながら役割を担うことで、自己を形成していくことができる。ここでは保育者に指導されることも統制されることもなく混沌として暮らしていくが、そこに混乱はなく、みな生き生きとして満たされた様子を観

察することができる。

今回の調査の目的は協働志向の行為と、その育ちの構造を捉えることから、これからの保育に求められる質的な向上に資する保育のありかたと保育者の専門性を検討することである。協働志向の行為とその育ちの構造に関しては、やらせではない生活という環境を作ることが協働志向性を高め、生活の必要性が予測を生じさせることで協働志向の行為が呼び起こされる様子が観察された。また、そこから導き出される保育のありかたと専門性は、民主主義的な価値観の定着と、それに基づく保育の展開が挙げられる。やまっこの保育を通して顕れているのは保育者の生きかたであり、もの見かたである。それは個人の自由と尊重、誰もが平等であること、弱者や傷つきやすい者との連帯といった姿勢であり、それは民主主義を標榜する我が国においては本来当たり前の姿勢であり、社会に遍満しているはずの価値観である。このような民主主義的な価値観は、全ての保育所が準拠する保育指針の内容に示されており、特殊な保育環境や専門性を要するものではない。これから求められる保育の質の向上を考える時、今一度保育指針を見直して、改めてその民主主義的な価値観に根差した普遍的な生活を大切に保育が求められる。

<参考・引用文献，その他>

- 1) Heckman, James, H. Giving kids a fair chance. The MIT Press. 2013
- 2) 遠藤利彦 (2016) 「否認知的能力の源にあるアタッチメント」『げ・ん・き No.158』エイデル研究所, 4-6
- 3) 秋田喜代美他 (2007) 「保育の質的研究の展望と課題」東京大学大学院教育学研究科紀要第 47 巻, 293
- 4) 溝口義朗 (2017) 「『園生活を、子どもも大人も区切りのない生活へ』倉橋惣三を旅する 21 世紀型保育の探求」フレーベル館, 45
- 5) 中西さやか (2016) 「ドイツにおける幼児期の学びのプロセスの質をめぐる議論」保育学研究第 54 巻第 2 号
- 6) 戈木クレイグヒル茂子 (2013) 「質的研究法ゼミナール第 2 版グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ」医学書院, 90
- 7) 溝口義朗 (2019) 「育 創刊号」一般社団法人日本こども育成協議会, 46-47
- 8) 菊地大介 (2020) 「協働志向性の視立ちに関する一考察 (1) - GTA を用いた概念の抽出への試み - 」有明教育芸術短期大学子ども教育実践研究第 3 巻, 有明教育芸術短期大学子ども教育実践総合センター, 3
- 9) 前掲書 5), 10
- 10) 前掲書 4), 45
- 11) 前掲書 7), 1-14
- 12) OECD の示す 3 つのキーコンピテンシーとして、個人と社会の相互関係能力、自己と他者との相互関係能力、自律的に行動する能力が挙げられており、非認知的能力の概念と重なる。
- 13) 汐見稔幸 (2017) 「さあ、こどもたちの「未来」を話しませんか」小学館, 83
- 14) 汐見俊幸 (監修) 保育所保育指針ハンドブック 2017 年告示版, Gakken, 25, 41
- 15) 溝口義朗 (2018) 「暮らしと教育」『発達 154 保育の場から考える新指針・新要領』ミネルヴァ書房, 22
- 16) レイプ&ウェンガー：佐伯胖 (訳) (1993) 「状況に埋め込まれた学習」産業図書
- 17) 三谷大紀 (2018) 「園に乳児が「いる」ことの意味」『発達 154 保育の場から考える新指針・新要領』ミネルヴァ書房, 26
- 18) 溝口義朗 (2014) 命・身体・自然 『子どもの文化 9 月号』子どもの文化研究所
- 19) 前掲書 4), 45
- 20) 溝口義朗 (2017) 「今、なぜ子どもを地域で育てていこうとする流れがあるのか」『子どもの文化 6 月号』子どもの文化研究所, 20

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菊地大介	4. 巻 3
2. 論文標題 協働志向性の育ちに関する一考察（1） - GTAを用いた概念の抽出への試み -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 有明教育芸術短期大学 子ども教育実践総合研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地大介	4. 巻 -
2. 論文標題 生活基盤型保育における協働志向性の育ちに関する一考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本保育学会第73回大会 論文集CD-ROM	6. 最初と最後の頁 P-809
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地大介	4. 巻 4
2. 論文標題 協働志向性の育ちに関する一考察（2） - 生活基盤型保育における実践から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 有明教育芸術短期大学 子ども教育実践総合研究	6. 最初と最後の頁 13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地大介	4. 巻 -
2. 論文標題 生活基盤型保育における協働志向性の育ちに関する研究 - 寄り合い行動に注目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本保育学会第74回大会 論文集CD-ROM	6. 最初と最後の頁 P-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 菊地大介
2. 発表標題 生活基盤型保育における協働志向性の育ちに関する一考察
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 菊地大介
2. 発表標題 生活基盤型保育における協働志向性の育ちに関する研究 - 寄り合い行動に注目して -
3. 学会等名 日本保育学会第74回大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------